

理想とする人物像

当事者意識を持ち、自分のみならず関係者を交えて問題解決ができる社会人基礎力の育成

目的・目標		実現案の概要	①組織体制・制度	②要員(人材育成)	③設備・経費など
1. キャリアにつながる問題解決能力・コミュニケーション能力の育成					
1.1 自己評価・他者評価を用いた問題解決能力の育成 1年目は3年生を対象に開始し、2年後に対象学年を全学年に拡大する。	[ポータルサイト・ポートフォリオ等の活用] 授業の課題・レポートやインターンシップなどの体験談を蓄積し、いつでも自身で閲覧できるようにする。それと共に履修状況や出欠状況などの情報も閲覧できることで、学生自身が現在目指しているキャリアや将来像にむけて自分に不足していることをイメージ化し、自己分析による自己評価を可能とする。また、それらに対し、教職員のみならず、卒業生や実習先の担当者等を交えて、各学生の個性や適性を生かした多面的できめ細かな指導・助言ができるキャリア教育を実施する。	キャリア支援の担当部署が中心となり、学内外の関係者を交えた運用体制とする。また、学生一人一人に担当教員を決める。担当教員と職員が連携して各種指導やアドバイスを行う。また、学生が自己評価を行うためのセミナーやオリエンテーションを定期的に開催する。	教職員・学生・学外者をつなぐことができるスタッフシステムを利用しない教職員へ啓蒙活動を行うため、システムの有効性を理解している教職員の養成	PCやモバイル端末に対応したシステム システム利用料	
1.2 SNS等のツールによるディスカッションの場の提供 授業での利用から開始し、導入3年目までに教員の利用率を30%、学生のシステム利用率(一度でも発言)を90%にする。	[学生の発言力向上の仕組みの構築] 学生同士や教職員、実習先の担当者間等で、時間と場所を越えてのコミュニケーションを実現できる場を与える。	システム部門による仕組みの提供と教務部門による教員・学生の利用促進活動(SNSの成功例の共有)を実施する。書き込み内容は各コミュニティの管理者単位で管理する。	コミュニティの性質に応じた管理者(教職員および学生)	PCやモバイル端末に対応したSNS システム利用料	

目的・目標	実現案の概要	①組織体制・制度	②要員(人材育成)	③設備・経費など
2. ディプロマポリシーの実現、達成および専門知識のレベルアップ				
<p>2.1 授業支援ツールの提供、活用拡大の促進</p> <p>ポータルシステムを利用した教員からの情報発信については導入3年後までに30%の利用率を目指す。スマートフォンやタブレット端末を利用したシステムの提供開始は2年後とする。</p>	<p>〔効果的な授業支援ツールの提供・活用・拡大の促進〕</p> <p>ポータルシステムを利用して、授業に関連する有意義な情報等を発信することにより、学習効果を高めたり、意欲の喚起を促すことにつなげられるようにしていく。また、スマートフォンやタブレット端末等を出席管理に活用したり、Q&Aやその分析ができるツールを組み込んだ、教員が学生の授業理解度の確認ができるようなクリッカーと同様の機能を、クリッカーよりも身近なものを活用したシステムとして提供する。</p>	<p>システム部門にて仕組みの提供と教務部門による教員・学生の利用促進活動を実施する。</p>	<p>システムを利用しない教職員へ啓蒙活動を行うため、システムの有効性を理解している教職員の養成</p>	<p>ポータルシステムについては既存のものを利用</p> <p>モバイル端末に対応したシステムの構築費用</p>
<p>2.2 達成度を学生自身が確認できるポートフォリオを構築する。</p> <p>学生全体のGPAの平均値を実施前年度より0.5以上アップさせる。</p>	<p>〔達成度を学生が確認できるポートフォリオの構築〕</p> <p>ポートフォリオを活用し、学びやいろいろな取り組みの情報を記入し、それに対し教員が到達目標に対する達成の度合いを示すような仕組みを整える。それにより達成度が高くない学生に対しては何が足りなくて、どのように補えばよいかを、また、達成度が高い学生に対しては更にどのような学習や取り組みをしたらよいかを示してあげることにより、学習レベルの底上げを目指すことにつなげていく。また、実施教員へは授業改善アンケート結果との分析結果等をフィードバックしたり、モデル講義を通じて各教員へ啓蒙活動を行う。</p>	<p>教員によるプロジェクトチームを結成し、多くの教員が取り組むための環境作りを行う。教務部門は結果のフィードバックやサポート等を行う。</p>	<p>ポートフォリオを積極的に利用できる教員結果の分析やサポートを行うことのできる職員</p>	<p>簡易に利用できるポートフォリオシステムの導入</p>

目的・目標	実現案の概要	①組織体制・制度	②要員(人材育成)	③設備・経費など
3. 大学での学びに対する支援体制の構築				
<p>3.1 各種システムを利用した制度の構築、及び教員の協力体制の強化</p> <p>3年後までに、全学でポートフォリオと学生カルテの制度を確立し、全教員へシステムの定着を図る。</p>	<p>〔各種システムを利用した学生指導〕 学生指導や情報発信を行う上で、ポートフォリオや学生カルテをはじめとする学内システムの有効性を理解してもらい、より綿密な学生指導へ役立ててもらおう。 1年目は協力してもらえる学部を作り、3年後には指導教員制度とともに全学での本格運用を目指す。</p>	<p>システムの有効性の啓発と制度作りを行う教務・学生・情報部門の部署の職員と各学部の教員代表者からなるプロジェクトチームを結成する。</p>	<p>システムを利用しない教職員へ啓蒙活動を行うため、システムの有効性を理解している教職員の養成</p>	<p>ポートフォリオと学生カルテシステム</p> <p>システム利用料</p>
<p>3.2 統計による体系的な履修モデルを確立する</p> <p>1年目は統計作業を進めるとともに、精査した統計結果を試作的にシラバスに反映する。 2年目は、1年目の統計結果を踏まえ、過去の統計と比較した上で、コメント等を示す。 3年目以降は、科目の統廃合や新規科目の設置を行うとともに、卒業後の進路の適したあるいは修得したい知識や能力を養うことのできる履修モデルを作成して学生に示す。 また、次期カリキュラム改定への指標も作成する。</p>	<p>〔履修状況に応じた学生支援〕 卒業生を含め過去に学生が履修した科目の分析を行なう。 具体的には「ある科目を履修した学生が次に履修することの多かった科目は何か」などの統計をとりまとめシラバスを通じて学生に提供する。 また、それらの科目を履修した場合のメリットや関連性について、教員からのコメントやアドバイスも同時に学生に発信する。 最終的には、学生からの意見も集約した履修モデルを作成して学生に提供する。</p>	<p>学部や学科から選抜された教員によるプロジェクトチームを結成する。 カリキュラムの構築や時間割編成にかかわる教務部門、ならびに統計処理を行う情報部門の職員も、アドバイザー的な立場として同チームに参加する。 プロジェクトチームは統計結果を精査し、学生に公開する科目を決めるとともに、学生が履修科目を決める際の指標をコメントとして公表する。 また、履修後には学生にアンケートをとり、公表した内容の評価を受け、学生の意見も反映させた履修モデルを作成する。</p>	<p>学生がひとつの目標に向けて体系的な履修ができるように、見せ方に工夫の必要がある。 見せ方や教員の示す指標によっては、受講者数の大幅な増加や減少が発生する。 また、履修上の前提条件や制約が必要以上に増える可能性もある。 これらのバランスをとりつつ、教育効果の高まる履修モデルを示すために、各科目の特性やメリットを幅広く理解した上で情報提供ができる能力の養成が必要。同時に分析する能力も必要となる。</p>	<p>既存のポータルシステムに統合する</p> <p>蓄積したデータを分析するための専用ツールの開発</p>
<p>3.3 保護者への情報提供・協力要請</p> <p>来年度中に学生の成績、履修、出席情報を保護者が参照できるようにし、家庭でのフォローを要請する。</p>	<p>〔ポータルサイトを利用した学生情報の保護者への提供と協力体制の構築〕 ポータルサイトを使用できる保護者用のIDを入学時に発行し、学生の成績、履修、出席情報を参照できるようにする。 その情報をもとに家庭内でも大学での学びの姿勢をフォローできる体制を整える。</p>	<p>教務部門が中心となり実施し、システム運用部門がサポートする</p>	<p>保護者からの利用方法や内容に関する質問に答えられるスタッフ</p>	<p>必要な場合にはポータルサイトのカスタマイズ費用</p>